

越 知 小 学 校

研 究 同 人

校 長	矢野 有茶	養護教諭	森 雪菜
教 頭	改田 騎隆	栄養教諭	須内 瑠璃
教 諭	隅田 澄子	主 幹	清遠 幹子
教 諭	内山 菜摘	学習支援員	上田 久美子
教 諭	池本 玲奈	学習支援員	西川 裕文
教 諭	柿内 創	特別教育支援員	山崎 英代
教 諭	井口 健太郎	特別教育支援員	岡林 翠
教 諭	上地 平真	特別教育支援員	山田 紀子
教 諭	高橋 晴香	特別教育支援員	鎌倉 知佐
教 諭	三浦 光津美	特別教育支援員	謝花 千賀江
教 諭	村山 あかり	特別教育支援員	山下 美智
教 諭	小川 沙也加	図書館支援員	福永 光
教 諭	堀野 真一	学校業務支援員	山下 浩
講 師	西村 友宏	ICT 支援員	高橋 秀幸
講 師	高橋 初枝	コミュニティスクール コーディネーター	門谷 美智子
講 師	谷中 豊	用務員	岡林 ゆみ

I 研究の概要

1. 研究主題

自ら学び、豊かに考える子どもを育む
～自立的・自律型の学習者の育成～

2. 研究主題設定の理由

(1) 今日的な教育課題から

現在、社会はコロナ禍をきっかけに、これまで以上のスピードで変化をしている。子どもを取り巻く環境も、その社会状況の中で揺らぎ、多様化している。愛情に枯渇している子ども、学力状況の課題から自信や肯定感を無くしている子ども、SNS や YouTube 等の普及や家庭環境の変化により、低学年からその影響が心配される子ども、コミュニケーションがうまくとれず孤独感を胸に秘めている子ども、個々の状況等をあげればきりが無い。このような社会状況や児童を取り巻く環境の変化により、学校もこれまでの学校では対応できない状況になってきている。(令和6年度学校経営方針より)

また、令和3年度の『「令和の日本型教育」の構築を目指して』の中でも、急激に変化する時代において教員の担うべき業務負担や子どもの多様化、学習意欲の低下などの影響から、これから子どもたちには、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要であると述べられており、必要な改革を躊躇なく進めることで、従来の日本型学校教育を発展させ、「令和の日本型学校教育」を実現させることが求められている。

上記の教育課題から、自律的学習者・子ども協働者を目指すことで、全ての子どもの可能性を引き出し、自ら学び、豊かに考える子どもを育む。

(2) 昨年度までの研究から

本校では、平成25年度より高知県教育委員会の指定事業を受け、児童が主体的・対話的に学び合い確かな力を育むための実践研究を進化・発展させながら進めている。どの学年も児童自らが学習リーダーとして授業(学習)を進め、学校としての学びのスタイルを構築し、実践研究を進めている。また、一人一人がタブレットやノートなど自分の学びやすさに合った学習の方法を選択することができる機会を設けることで、個別最適な学びの実現を目指したり多様なグループ学習(協働的な学び)を生み出し学習活動を柔軟化させたりするなど、様々な取組を構築しているところである。

(3) 研究についての基本的な考え方

①「自ら学び、豊かに考える」子どもの姿 ～自立的・自律型学習者～

本校では、「自ら学び、豊かに考える姿」を以下のようにとらえる。

- ・自ら単元をデザインする姿（学習過程の選択）
- ・単元の見通しをもち、自ら学習課題を設定する姿
- ・自ら学習方法を選択する主体的な姿（インターネットや思考ツール等の選択）
- ・クラウドを効果的に活用しながら探求している姿（他者参照や共同・同時編集等）

(4) 研究仮説

クラウド等を活用し、自律型学習者を育成することで、児童が学ぶ楽しさを知り、個の力が伸びる。
「クラウド活用」とは、他者の考えを参照したり、共同・同時編集したりする。
「学習者主体」とは、学習者自ら学びを選択・決定し探求・課題解決を行っていく。

(5) 研究の視点

① 自律型学習者の育成のために

- ・目的に向かうための思考ツールの選択・活用
- ・クラウド機能を活用した「学習の整理・蓄積」「活動の共有」の工夫
- ・個別最適な学び「学習活動内での学習方法を選択できる場面の拡充」・単元計画の作成

◎学習リーダーの見直し・各学年に応じた役割【系統性】の精選（学習リーダー・自律型学習者の育成）

② 個別最適・協働的な学びの充実

- ・児童同士でやり取りする場面の充実→共同編集機能を活かした授業改善
- ・理解度等に合わせて課題に取り組む場面の充実→AIドリルを活用した習熟別の学習

(6) 学びの土台となる共通実践

①学習規律の定着のための共通実践事項

- ・授業づくり「これだけは」の全教員での共有
- ・「越知小学校の10カ条」の確認・毎月末のチェック
- ・児童セルフガイド「ま～・ナビ」を各取組のはじめに確認・活用

◎ノート展覧会での入賞ノートのクラウド上での蓄積＋入賞を逃した素晴らしいノートの蓄

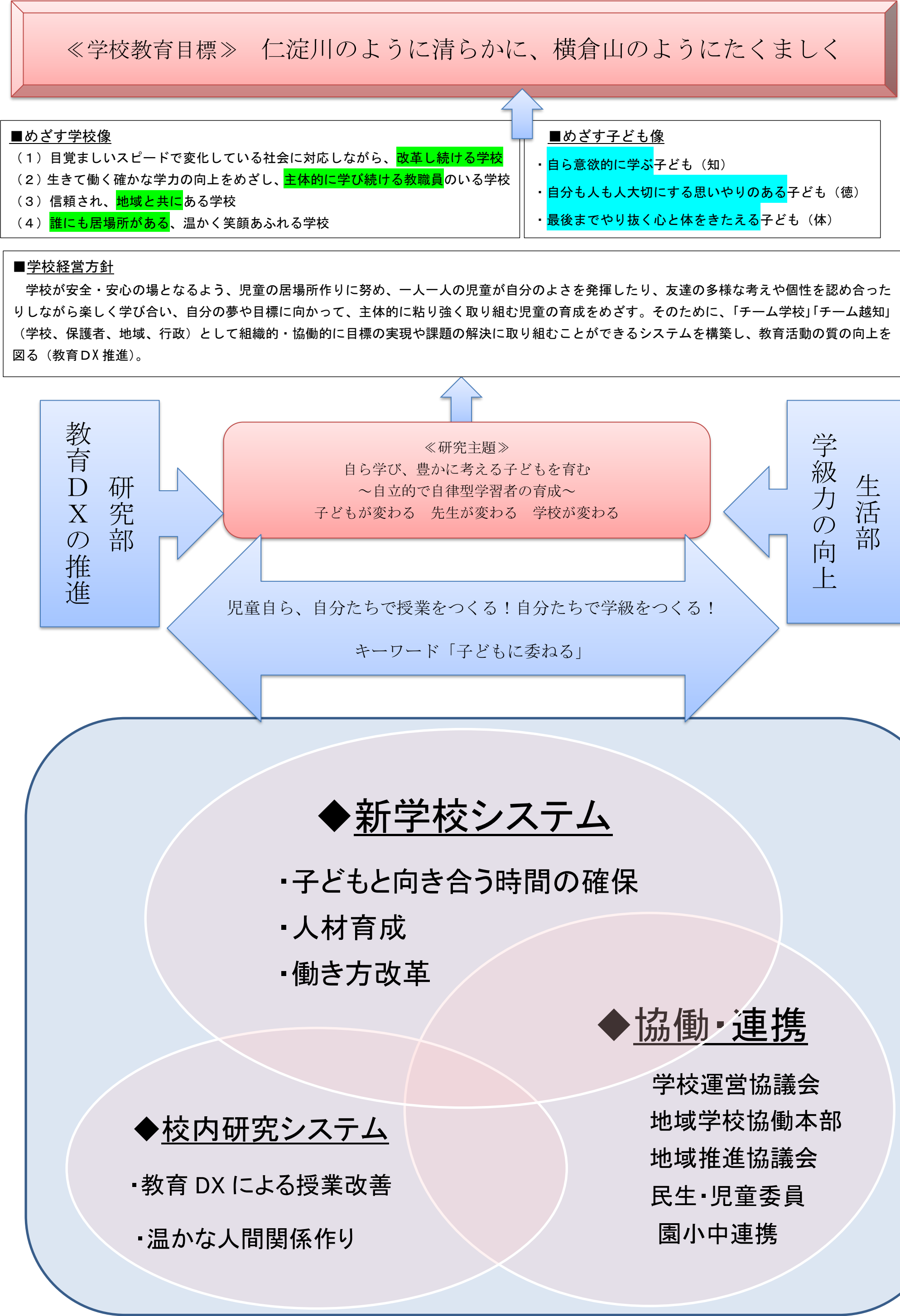
②基礎・基本のための取組

- ・横倉・横倉ふれあいタイム・チャレンジタイムなどの計画・確実な実施
- ・目標をもったおち漢字検定・漢字能力検定の計画的な実施
- ・おちドリル・これっきり図書などの計画的な実施と確認
- ・カラフルタイムを活用した基礎・基本の定着

- ・週に一度のミニテストの実施

③異学年交流での学び合い

- ・横倉ふれあいタイムで異学年同士の学び合いの実施
- ・学習ドリルアプリ「すらら」を活用した学習交流
(ホームワーク等で取り組んだ問題から友達に出題・解説等)
- ・学年間を越えた学び合いの環境づくり (道徳や体育・音楽での異学年学習)
- ・子ども授業参観のシステム化



Ⅱ-1 研究の概要（研究部）

1. 研究部の取組

（1）研究方法・研究内容

①教育 DX の推進	②育成指標 (系統表づくり)	③加力学習	④家庭学習	⑤主体的な活動
ア 授業づくり講座公開授業 (ア) 第5学年 (イ) 第6学年 (ウ) 講師招聘 (エ) 指導主事訪問 (オ) 指導案検討 (カ) 先進校視察	ア ICT 活用能力 イ 基礎的な力 ウ 学び方 エ ノートづくり	ア デジタルドリル (ア) すららドリル (イ) eライブラリー イ プリント (ア) これっきりプリント(越知小) (イ) 中部教育事務所作成プリント (ウ) MIM (エ) Peratto5・6年	ア 時間・内容 イ チェック週刊	ア 授業力向上委員会

①教育 DX の推進

ア 授業づくり講座公開授業【6月13日(木)】

(ア) 第5学年（算数科「小数のかけ算・わり算」）

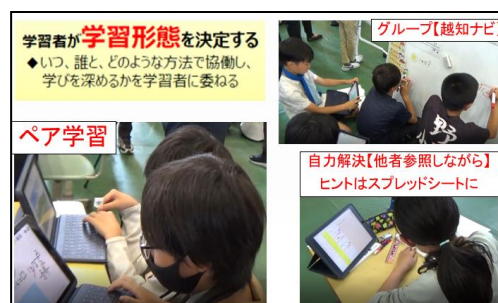
a 学びの履歴の蓄積：スプレッドシートの活用

まず、学習形態を児童に決定させるために、自由にではなく選択できる場面をスプレッドシートに設定した。【自力解決】【ペア】【グループ】など本時の学びに対して、どの方法が一番自分に最適かを選ぶ項目を下記の赤枠の中に設けた。学習の中で、授業者は児童の思考をタブレットで把握しながら机間指導することで、特に困り感を抱えている児童を中心に、十分な時間を使いながら支援することができるようになってきた。

また、それ以外の算数科の授業での活動についてもスプレッドシート内に全児童が蓄積していくため、他の児童の考えを参考にしながら不安感を抱くことなく、苦手な児童も学ぶとすることができていた。



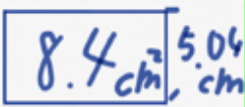
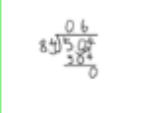
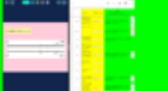
（実際に授業で活用したスプレッドシート）



（児童が選択し、学びを進める場面）

b 家庭学習とのシームレスな学習

授業と家庭学習をシームレスな学びにするために、授業で活用したスプレッドシート内に小数÷小数や小数×小数の問題づくりをするための【家庭学習】の枠を作成した。帰宅後もスプレッドシートを開き、その日の授業を思い出しながら問題を作ることを習慣化させることで、計算能力だけでなく思考して自分で問題を作る力を育成することができた。しかし、数直線から問題文を作ることや数直線自体を描くことが難しい児童に対しての支援が十分でなかったことも浮かび上がってきた。

	問題	図	計算
1	5.04÷8.4の問題を作りましょう。 ヒント①1あたりを聞くようにするといいですね。	【数直線・図・テープ図】	
2	長方形の底の長さが5.04cmでその面積は、8.4cmです。横の長さは、何cmですか？		
3	木のブロック5.04個の重さが、8.4gです。ブロック1個だと、重さは何gですか？		
4	長さ5.04個の縄の大きさは、8.4グラムです。3個の時何グラムになりますか？		

(家庭学習の実際の問題)

c 成果○と課題●

○スプレッドシートの活用により、教師は、日々の児童の学びをより見取りやすく、なおかつ評価しやすい環境を整えることができた。一方、児童たちは自分の学んだことがいつでも他者参照されるということから以前よりも相手意識をもった説明を書くことができ、苦手な児童は他者参照することで自分の考えを持つことができた。また、スプレッドシートが蓄積されていくことが学習履歴となり、前の学習を忘れてしまった児童も見返すことで思い出し、自力学習につながった。

●他者参照できることで友達の意見をただ真似してしまう児童もいる。その児童に対して教師がどのような手立てができるのかが今後の課題となってくる。

(イ)第6学年(社会科「近代国家をめざした国づくり」)(成果と課題)

○学習問題に対する仮説の設定、更新を行うことで、一人一人が自分の学習計画を立て、より自律的に学習に向かう複線型の授業を行うことができた。また、ロイロノートの共有ノートを活用することにより、「いつでも」「どこでも」「だれのでも」「何度でも」をキーワードに他者参照を積極的に行い、学びを深めようとする児童の姿が増えた。加えて、教師もタブレット端末上で学習の進捗と深度を一括で把握できるため、より効果的に個別支援を行うことができた。

●今年度はGoogleのスプレッドシートやスライド等の標準仕様アプリを十分に活用できなかった。今後、社会に出ても活用することができる力を育成するためにも、教員側のスキル向上も必須となってくる。

(ウ) 講師招聘

今年度は、京都教育大学の専任講師である大久保紀一郎講師を招聘し、教育 DX の視点による授業改善のご指導をいただいた。今の我が国における状況から、複線型の授業をどのように教材研究していけばいいのかご教授いただいた。ご指導頂いたことをもとに、一斉授業の脱却を目指して、各学年の系統性を整理しながら各学年ができることをロードマップに基づいて計画し、実践を行っていった。

自己紹介

大久保 紀一郎（おおくぼ きいちろう）
博士（情報科学）／京都教育大学・専任講師

職歴

2023 - 現職
2022 - 2023 鳥取大学教職大学院
2012 - 2022 鳥取県立小中学校 教諭
2007 - 2012 東京都立小中学校 教諭

専門分野

教育工学

専門領域

メディア教育 メディア・リテラシー

所属学会

日本教育工学会 日本教育メディア学会 日本読書学会 コンピュータ利用学会 等

委員等

文部科学省学校DX戦略アドバイザー、教科書研究センター特別研究員





Kiichiro OKUBO

京都教育大学 All Rights Reserved

我が国の状況





A 斉指導	B 斉指導下での協働	C 個別最適×協働
	 全員協働で取り組んでいる 一協働的ではあるけど個別最適ではない →子どもは喜んだことをする	 個別に取り組む子どももいれば、協働で取り組む子どももいる →その選択も子どもができる

Kichiro OKUBO
© 京福教育大学 All Rights Reserved

今日の授業から

5年生の授業力向上委員

Kichiro KUBO 京都産業大学 All Rights Reserved

複線型授業の教材研究

単線型 (従来型)

一斉でインプット

教師の指示で一斉に講義活用や協働

教師の指示で一斉で発表

複線型 (クラウド活用型)

一斉でインプットや課題・活動確認

教師と指導

自己発表

発表者自己決定

発表者

課題提出

自己発表

協働者自己決定

協働者

課題提出

自己発表

協働者自己決定

協働者

課題提出

ここで何をどう共有するか？

図6 単線型 (従来型) と複線型 (クラウド活用型) の授業展開の例

Kiichiro OKUBO | 筑波大学 All Rights Reserved <https://akaab.net/?author=1>

(工) 指導主事訪問

5月8日に中部教育事務所の指導主事にお越しいただき、教育DXの必要性和実践例を紹介していただいた。第5学年の小数のかけ算・わり算の単元においては、式と問題文を対応させる力を身に付けさせるための実践例や、家庭学習とのシームレス化に向けた実践をもとにスプレッドシートを試行錯誤しながら活用し、第5学年が研究授業を行った。また、算数科・社会科の授業に共通して資質・能力の育成の観点からご助言いただき、研究が推進された。

(授業例：中部教育事務所のスライド資料から)

[illegible]

(オ) 指導案検討

教育 DX の観点から、指導案の検討においても、スプレッドシートを活用しながら職員同士で意見を共有し、資質能力の観点から中部教育事務所の指導主事達からご指導をいただき蓄積を行っていた。スプレッドシートに蓄積していくことで、いつでも検討した内容を参照・共有することができた。

	上地先生より	上地先生からの話を受けて	各学年で、今回の授業をするなら学年でどのような力【教育DX・ICT活用能力等】をつけるとういのか	右の内容を今週中までに各学年のアイパッドの活用状況	デジタル
低	変わった所：自分たちで進度を選べる十社会科の教科の目標を両立すること。共同編集の歴史年表について、かけてない子も書けるようになってきた。しかし、資料を貼っただけでは、学習の苦手な子には他者参照しにくいものになってしまった。	ジグソー活動にすると、小学生で初めて歴史を学ぶ児童は、歴史の流れの全体像がつかめずには、内容がわかりにくくはなりはしないか。やったグループはやったことでの理解はできるが、他の児童にそれを理解させるためにはどうしていくか。	クラスルームやロイロノートなど、タブレットの基本的な操作の仕方に慣れる。	本読みをロイロノートで提出している。国小交流で、国見のフラフープの様子を撮影し、アドバイスを送る。	e-ラーニングの活用で、教科書の学習内容を確認し、アドバイスを送る。
隅田	授業の内容について、ノルマントン号の事件をきっかけに日本が弱い立場にあることをつかむ。一国力が上がった。国際地位が上がった。政治、外交、人々の暮らしなどから自分たちでテーマを決め、グループも自分たちでつくるなどして調べる。バラバラになる。(なぜなら授業のテーマは、課題を児童が自分で設定することだから)一世紀機をつけて、自分の考えを発表する。→マイ歴史年表を作る。学習をふりかえる。	→理解させるための方法の例：自分の学びのための聞き方にするために、「必ず質問する。」「資料をもとに、質問の内容を考える時間をとる。」「史実をつかますことまでジグソーにするのは難しいではないか。課題：どこまでジグソー活動にして、児童にまかせせるか。今までの授業の中でも、言葉が難しい、聞きなれない単語を聞いて、児童が理解しにくいこともあった。児童につけたい力：教科書や資料集から自分の知りたいことを調べる力。それができていないと史実の理解について差が開き過ぎてしまうのではないか。また、児童に学習を任せるとしても、教師が内容を深く掘り込んでいかないと理解が深くなる。改善案1：条約が改正できた理由を単元を貫く活動として設定し、史実を学ぶ時間についてまとめで、条約改正できた理由としてまとめる。その後ジグソー活動で条約改正に大きく影響した出来事をジグソー活動で調べさせて共有する。	クラスルームやロイロノートなど、タブレットの基本的な操作の仕方に慣れる。Yahoo!キッズなどで、簡単な検索の仕方を知る。	時刻表をクラスルームで配信している。生活科で育てている野菜の成長過程を写真に撮っている。今後おもちゃ祭りや1年生に説明をするときに、ロイロノートを使う予定。	e-ラーニングの活用で、教科書の学習内容を確認し、アドバイスを送る。
内山			1年生ではタブレットの使い方に慣れることを重視する。6年生はロイロノートを使って表現の仕方を練習する。	学習ツールとして認識を持つため、漢字筆順アプリや検索機能を利用している。また、ロイロノートで音読を録音したり、ふせんの使い方を練習し、今後の学習に活かすための練習をしている。	e-ラーニングの活用で、教科書の学習内容を確認し、アドバイスを送る。
西村			共有ノートや提出物の活用 自分の考えと他の人の考えを比較し検討する	時刻表をクラスルームで配信する。算数の授業では、毎時間一枚シートを配り、見直しを持てるようにしている。学習方法の一つで、タブレットを活用できるようにしている。共有ノートを活用し、授業中の連絡をクラスルームで行って、各授業の振り返りをロイロノートで配信している。	e-ラーニングの活用で、教科書の学習内容を確認し、アドバイスを送る。
高橋 初			共有ノートを活用しながら、友達の見解をいつでも、どこでもみれるようにしていく。タブレット、ホワイトボード、ノートなど、自分で、学習方法を選択する児童が課題を自分ごとにしていく。そのため、教師と児童が共に、学習を進める。		e-ラーニングの活用で、教科書の学習内容を確認し、アドバイスを送る。
須内					e-ラーニングの活用で、教科書の学習内容を確認し、アドバイスを送る。
中					e-ラーニングの活用で、教科書の学習内容を確認し、アドバイスを送る。
池本					e-ラーニングの活用で、教科書の学習内容を確認し、アドバイスを送る。

(11月7日の研究授業についての指導案検討：スプレッドシートで共有したもの)

(カ) 先進校視察

月日	用務	場所
6月21日(金)	令和の授業づくり(教育DX)形骸視察研修	愛知県春日井市出川小学校
6月28日(金)	横須賀市立長沢中学校視察訪問	横須賀市立長沢中学校
1月27日(月)	四国中央市立川之江小学校視察研修	川之江小学校

②育成指標(系統表づくり)

今年度の重点課題である ICT 活用能力と基礎的な力を育成するための系統表を作成し、各学年で身につけておくべき力を再確認した。以下は実際の系統表である。

ア ICT 活用能力(系統表)

1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
●ICT 機器 (iPad) の基本的な操作 (起動・ログイン・終了・ファイルの保存)	●モニターやプロジェクタ等を活用した写真や動画の投影。写真など画像の印刷	●適切なフォルダを利用したファイル保存	●学習の用途に合わせて、ロイロノートやスプレッドシート、Jamボード、スライドなどを選択してつかえる。	●デジタル媒体による共同作業を行うソフト (Google Workspace等) の活用	●さまざまな情報について、表計算ソフトを用いたデータの図表化、分析
●音声入力・手書き入力を使った文字入力	●Yahooキッズなどのブラウザ検索を使ってインターネットで調べる	●地図アプリを使い疑似的にその場所を知る ●タイピングソフトを使ったキーボード入力	●検索エンジンの適切な活用 (キーワード検索、類似語検索等)	●表計算ソフトによる簡単な図・グラフ作成	●アンケートフォームによるアンケート作成と図表化、分析
●iPadやデジタルカメラを使って、目的に合った写真・動画撮影や画像収集、音声記録	●iPadと周辺機器 (デジタルカメラ等) を接続して、画像データのコンピュータへの適切な保存		情報の発信や情報のやりとりする場合のルールやマナーを守る。 ネットワークは公共のものであるという意識や相手への影響を考えて使う。		●ネットワーク上のルール・エチケット・特性を十分に理解したweb ページによる情報発信
●タッチパネルからの入力、ペイントソフトによる簡単な描画	●ペイントソフトで描画したものを操作したり動かしたりする (プログラミング)	●動画作成アプリを使い、簡単なビデオ製作	不適切な情報に出会ったときには、大人に意見を求め、適切に対応する。パスワードの重要性を理解し、正しく利用できる。	●プレゼンテーションソフトによる基本操作と、画像や文字等の編集	●インターネット上の伝達技術 (インスタグラム、YouTube 等) における適切な利用 (閲覧や書き込み)

イ 基礎的な力(系統表)

	目指す児童の姿 緑：学習リーダー 黄色：教育DX	教師【協働者】 の役割	学年	デジタルドリル	情報活用能力【木曜日の放課後学習】 今年度取り組んだことは【情報スキル】加筆・修正してください。	教育DX 【クラウド】	予習	授業前	授業中	板書（年度末の目標）	授業後
低学年	協働者（教師）と共に学習過程スタンダードに慣れ、学習を進んで行くことができる。そして、見通しをもって学習することができる。	見通しや課題・考察場面の発音や軌道の修正。肯定的な声かけ。価値づけ。	1年生	eライブラリの活用 国語を中心とした取組	・タブレットのルール・パスワードの確認 ・タブレットの起動方法 ・カメラ機能を使った写真 ・ロイノートの使い方 ・クラスルームの活用	ロイノートを活用した授業実践 学習スタンダードの徹底		・進行表 ・単元計画の確認 ・課・自・友などを板書に貼る ・教材の確認	・全体司会（進行を中心に進める）	・掲示物を貼る	ミニ協議会の司会・進行
	タブレットやアプリの活用方法を学び、自分で選択する力をつけるための方法を身に付ける。		2年生		・ビスケット ・コーディロボット ・情報モラル ・Googlemeetの活用 ・画像データのコンピュータへの適切な保存			・キーワード・言語 わざの準備			
中学年	協働者（教師）と打ち合わせを重ね、同じリーダー同士で相談して、低学年の経験を生かして進行以外にも学習をリードしていくことができる。	見通しや課題・考察の場面の発問内容をリーダーと共有。	3年生	eライブラリの活用 国語を中心とした取組	・ローマ字入力でのタイピングスキル ・インターネット検索の仕方	・学習形態の選択 ・学習方法の選択 ・ロイノートを活用した共同編集【3年生】 Googleを活用した共同編集【4年生】 ・他者参照の活用	学習内容を 予習する	・学習課題の事前学習 ・ヒント出し内容の検討 ・板書計画の検討	・ヒント出し	・課題やまとめ	ノートの回収 越知ゼミや板書の 撮影・蓄積
	学習形態や方法、過程を選択することで、学習者同士や多様な他者と協働し、異なる考えや他者の価値を尊重する。	肯定的な声かけ価値づけの 促し。	4年生		・Google【ドキュメント、スライド、スプレッドシート】の活用した表、グラフの作成 ・NHK for Schoolの視聴方法		家庭学習と 関連付けて 予習しておく。	・学習活動の柔軟化			
高学年	学習計画表から暗黙の作成。協働者との打ち合わせを通して自分たちが授業をつつていくことができるようにする。 （完全セルフ授業）	学習が苦手な 児童への集中的な支援。	5年生	すららドリル 【AIドリル】 スタディログを活用	・Google【フォーム】の活用、アンケートの作成、回答、集計 ・スクラッチを活用した授業実践【算数：多角形】	・チャット機能を活用した教員の支援 ・Googleを活用した学習履歴の蓄積 ・学習過程の決定 ①学習課題の設定②情報の収集③整理・分析④まとめ・表現のサイクルを意識した授業展開	考察場面の 発問や授業 の流れの作成	・つけるべき力の確認 ・キーワードの洗い出し ・課題の作成 ・専門的知識をもつ仲間との打ち合わせ	・時間配分の臨機応変の対応 ・困っている児童が多い場合の学習活動の修正 ・課題に向かうための発問やファシリテーター的役割	・完全板書（友達の発表を板書できるように） ・完全板書＋板書計画の作成	授業の内容はどうだったのかリーダーかクラスで帰りの会等で振り返る。
	課題を設定し、過程や形態を選択することで、自分の学びを調整することができる。		6年生		・理科でのプログラミング学習【電気】 ・デジタルによる新聞【掲示板の作成】						

ウ 学び方

本校の研究のキーワードとなっている自立的で自律的な学習者の育成に向け、授業スタイルと上記で述べた ICT スキルの向上の 2 つの側面からアプローチを図った。

取組の具体として、1・2 年生では、学習リーダーを活用した越知スタンダードでの授業づくりを徹底することとした。3・4 年生では、一人学び、ペア方式、ゼミ方式等学び方のスタイルを増やすことを目標とした。5・6 学年では、学習計画をもとに、学習形態（個人・ペア・グループ）、学習方法（ノート、タブレット、話し合い）の自己決定を行うことを目標とした。

上級生は新しいスタイルでの学習方法に 4 月初初は戸惑っていたが、継続して取組を進めていくうちに、学び方を自己決定する姿が増え、自立的な学習者の育成に効果があつたと考えられる。

一方で、仲良し同士でのグループ活動や友達の丸写しになってしまう等、自律的な学習者としての姿には課題が見られた。この課題は、授業力向上委員会の取組や、学習スタイルの統一を徹底すること等、学校全体で多面的に取り組み、改善していく必要があると考える。

エ ノートづくり

(ア) ノート委員(3・4年生)によるノート展覧会・ノートコンクール

児童の日々の授業におけるノートづくりの意識向上や、一人一人の書く力を高めることを目的に、授業でのノートを見合ひ、評価をするノート展覧会やノートコンクールを行っている。ノート委員が、評価基準を基に評価・審査を行うことで、学年の枠を超えたノートづくりの交流や質の高いノートづくりができるようになってきた。ノートを見合う中で児童から「振り返りは自分の言葉で書けているが、もっとくわしく書けるといい」「自分の考えはよく書けているが、友達の考えを書いているノートが少ない」などの気付きが増え、集会等で全校に呼びかけることで、全体のノートづくりの向上につながった。



(ノート展覧会の様子)



(集会で呼びかけているノート委員)

(イ) 横倉山委員会(5・6年生)による自学コンクール

日々の授業でのノートだけでなく、家庭でも効果的な学びのノートづくりができるようになることを目的に、2ヶ月に1回自学コンクールを実施した。横倉山委員会の児童が、評価基準に基づき審査を行い「ていねい部門」「パーフェクト賞」「びっしり部門」などのノートを表彰・掲示することによって、自学ノートの質も高くなっている。自校で作成した学びのセルフガイドブック『まーナビ』を活用して自学ノートの作り方について確認をしたり、委員会の児童が集会で自学ノートコンクールの取組について呼びかけをしたりすることで児童が主体的に取り組めるようになってきている。



(自学コンクールについての掲示)

全校で統一して目標を立てることで、自分の目標をもち日々取り組むことで、学び続けるためのスキルや素地が身に付いてきた。保護者も参観日等でノートの掲示を見て家庭でも声かけをしてくれている。

③加力学習

ア デジタルドリル

本校では、「eライブラリ」を全学年で、5・6年生では、自立的で自律的な学習者の育成を目標として、AIドリルである「すららドリル」を導入した。昨年度の取り組みでは、ただ取り組むだけになってしまい、分析や見取りが不十分であったことが課題であった。

そこで、本年度はスタディログを活用した自己分析を行うことで、児童が自分の苦手や得意を把握し、学習内容を判断することができる力を育成することを通して、デジタルドリルの強みである基礎基本の確実な定着を目標とした。また、中学校と共通のツールを活用しているメリットを活かすことができるよう、小中連携を充実させることを目標とした。これらの目標を達成するために、今年度は主に2点の取り組みに重点を置いた。

1点目は、スタディログを活用した自己分析である。この取り組みでは、小中連携の観点も踏まえ、中学生からログの活用方法や学習のサポートをしてもらう活動を2回実施した。

2点目は、家庭学習での活用である。主に算数科の基礎基本の定着を意識して課題を出した。

今年度の取組を振り返って、自律的な学習者を育成するために、ログの見方を段階的に進めていく必要性を感じた。来年度は低学年・中学年・高学年のブロックごとに系統立てて、自律的な学習者の育成に向けて計画的な研究を行っていきたい。



単元	授業	内容	評価
60-61	60-61	60-61の活用	10/10000
62-63	62-63	62-63の活用	10/10000
64-65	64-65	64-65の活用	10/10000
66-67	66-67	66-67の活用	10/10000
68-69	68-69	68-69の活用	10/10000
70-71	70-71	70-71の活用	10/10000
72-73	72-73	72-73の活用	10/10000
74-75	74-75	74-75の活用	10/10000
76-77	76-77	76-77の活用	10/10000
78-79	78-79	78-79の活用	10/10000
80-81	80-81	80-81の活用	10/10000
82-83	82-83	82-83の活用	10/10000
84-85	84-85	84-85の活用	10/10000
86-87	86-87	86-87の活用	10/10000
88-89	88-89	88-89の活用	10/10000
90-91	90-91	90-91の活用	10/10000
92-93	92-93	92-93の活用	10/10000
94-95	94-95	94-95の活用	10/10000
96-97	96-97	96-97の活用	10/10000
98-99	98-99	98-99の活用	10/10000
100-101	100-101	100-101の活用	10/10000

(スタディログ)



(中学校との合同学習会の様子)

(ア) すららドリル

月日(校時)		学習名	
10月11日(金)2校時		「すららドリル」活用授業	
本時のねらい(2/2時間)			
・家庭学習や帯タイムで取り組んできた学習履歴をもとに、自分の苦手領域を把握し、自己課題を設定する。			
・取り組んだ問題で分からない問題を友達と学び合うことで解決し、苦手領域を克服する。			
評価			
・自分の苦手領域を把握し、自己課題を設定することができる。			
・取り組んだ問題で分からない問題を友達と学び合い、解決することができる。			
学習課程		学習活動(○学習リーダーの発問・予想される児童の反応)	留意事項
【振り返り】		1 前時のすららドリルの取組の振り返りをペアで伝え合う。 ・全員立ち、一人ぶつぶつ・ペアでぶつぶつ振り返りを共有する。	
【展開】 問題提示 9:30 問いをもつ 見通し		2 現在学習している単元に必要な力を確かめる。 ○今の学習では、どんな力が必要ですか。 ・小数のわり算の筆算が必要だと思います。 ・小数の大小関係が苦手なのでやらないといけなと思います。 3 スタディログを起動し、必要な力の中から自分の苦手領域を確かめる。 ○自分のスタディログを開いて、点数が低い所を確かめましょう。 ・僕は、小数の問題の正解率が低いな。 ・わり算の筆算の間違が多いな。 ○点数が低い所を高くするために今から取り組むユニットを決めましょう。 ・よし今日は、4年生の時を中心に組み込んでみよう。 ・小数がまだ覚えきれていないから小数をがんばろう。 ○この時間の課題を自分で決めましょう。	・スタディログの中から、赤く表示されている項目に焦点を当てさせる。 ・「教科書から選ぶ」の項目から選択させる。 ・スプレッドシートに目標を書きこませる。 ・自分で課題を設定させることで、児童自身の意欲の向上をめざす。 ・取り組んだ問題で分からない問題を友達と学び合い、解決することができる。 (スプレッドシート)
課題設定 9:40		4 それぞれが課題【個人課題】を確認する。 【例】小数の問題に挑戦し、課題をこくふくしよう。 (一人(5分)班学び(10分)全体学び・考察(12分)まとめ(3分)振り返り(3分))	
解決活動 9:43 ・自力学習 ・グループ学習(学習形態の設定)		5 一人学び(自力解決)を行う。 すららドリルの自分の苦手領域に取り組む。苦手な領域で解説を見ても分からない問題については、スクリーンショットしておく。 ○自分の点数が低かった問題に取り組ましましょう。分からない問題を2・3問スクリーンショットをしてあとで友達と話し合いましょう。 ・この問題は難しいからあとでみんなに聞いてみよう。	
集団解決 9:55 ・学び合い①(意見出し)		6 ペア・グループ学習を行い、意見を伝え合う。【学習形態の選択】スクリーンショットした問題を自分が選択した学習形態の友達と出し合い、分からなかったところを分かるようにする。 ○自分が解くことができなかった問題を友達と出し合って解決しましょう。 ・この分数の問題はどうやって解けばいいかな？ ・この問題が分かれば、次の算数の時間も分かるかもしれない。	
【終末】 10:10 振り返り		7 スプレッドシートで学びの振り返りを行う。 今日は、小数の問題に挑戦しました。小数点の位置やわり算の筆算のやり方を復習できたので、次の算数の時間では、少しは自信をもって取り組むことができますと思います。	・振り返りの視点を示す。

(イ) e ライブラリー

今年度は、全学年国語に重点を置いて取り組むこととなっていたが、指標を明確化できておらず、高学年の「すららドリル」の検証事業もあったため、十分な研究を行うことができなかった。来年度は、「みらいシード」にAIドリルが移行するため今年度の反省点を活かして、指標を各学年に設けて、検証を図っていきたい。

イ プリント

(ア) これっきりプリント(越知小)

放課後加力学習では、各学年で理解してほしい内容がまとめられた「これっきり算数プリント」に取り組んだ。4年生以上の学年では、3年生からの「これっきり算数プリント」に取り組み、児童が学習のつまづきを確かめられるようにした。さらに、月に一度、同プリントで確認テストを行い、100点となるまで何度もやり直して、児童が学習内容を確実に理解できるようにした。

(イ) 中部教育事務所作成プリント

国語では中部教育事務所作成プリントを活用し、文法や文章のきまりを理解することや語彙を増やすことをねらいに取り組んだ。「主語と述語」や「手紙の書き方」など、学習した内容が1枚にまとまっていたので児童にとって取り組みやすく、学習内容をつかみやすかった。

(ウ) MIM

すべての学習の基本である読みの基礎を確実なものにしていくために、2学期から「MIM」に取り組んだ。月曜日の昼休み後(10分間)1, 2, 3年生で実施した。子どもたちの読みの流暢性を育み、読解力へとつなげていくために指導の原則に基づいた指導教材を使って、楽しんで学んでいけるようにした。まずは、ルールの明確化(視覚化や動作化を通じた音節構造の理解)、次に、かたまりとして語を捉えることによる読みの速度の向上(プリントやテストの利用)、更には、日常的に用いる語彙の拡大と使用を目指して取り組んだ。実際に、板書を写したり、作文を書いたりする時に書き方が分からなくても、言葉の動作化をすることで理解できる姿があった。児童自ら動作化として、テストの見直しをしている姿を見かけることもあり、読み書きを獲得していくための助けになっていると言える。12月に実施した確認テストの結果を次年度に引継ぎ、継続して取り組んでいきたい。

(エ) Peratto5・6年

夏季校内研の中で本校の児童に文章の「読み取り」、「書き」の弱さが見られるということが出された。そこで「読み取り」、「書き」の基礎学力を定着させるために継続的な取り組みとして「視写」を行うことにした。

この「視写」をするときに子どもたちに意識させたい点は、1字ずつ写すのではなく、「言葉のまとまりで覚えて写す」という作業を繰り返すことで、文章の意味が素早く読み取れ

るだけでなく、文章の組み立てや表現技法、言葉のルールを自然と身につけさせることをねらいとして行うことにした。そうすることで、教科書の文章を読む時やテストの問題文を読む時などに「まとまり」をとらえる習慣が身につく、学習がスムーズに進められるだけでなく、学力の向上にもつながると考えた。

そこで、2学期より毎週月曜日の昼休み終了後の13:05～13:25までの20分間を利用して、高知新聞の「ペラット」(500字程度)＜1分間30字が可能＞を使って、5、6年生対象に行うことにした。現在は、2学期間で約7回実施されている。1回目、全員が半分ぐらいで終わっていたが、現在10分程度で、最後まで書ける児童も見られるようになってきた。(6年生:23人中6名)

④家庭学習

ア 家庭学習の時間、内容について

年度初めに各学年で話し合い、宿題の量、内容が学年ごとに統一されたものを決めた。さらに、4年生以上の学年は自分で課題を見つけ、自分の学習に取り組めるようにと自主学習の比率を多くすることにした。また、家庭学習が学年に応じた時間や内容となるように家庭学習の手引きを配付した。高学年には意図的に予習の宿題を出すこととし、児童が予習のよさを感じ、進んで予習してくるようになって考えて取り組むこととした。長期休みには、全学年デジタルドリルに取り組むこととし、タブレット学習に慣れ、内容や進度を自分で選択できるようにした。

イ 家庭学習チェック週間の取り組み

(ア) 調査結果

a 家庭学習時間達成率

(低学年 30分以上 中学年 45分以上 高学年 60分以上達成指標 90%)

5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
92.4%	89.1%	87.8%	89.1%	88.6%	92.5%	86.9%			

b 家庭学習提出率 (達成指標 95%)

5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
87.0%	86.5%	84.0%	85.0%	86.8%	90.5%	85.2%			

(イ) 結果分析

基礎学力の定着をはかり、学習習慣を身に付けさせるために各学年の家庭学習の取り組み状況を毎月1回調べ、数値化し、結果を掲示することで自分たちの取り組みを客観的に見ることができた。しかし、1学期は達成時間、提出率ともにわずかな減少を示していた。これは心機一転、意欲を持っていた児童が1学期の様々な学習や行事を経て、慣れや疲れなどから意欲が低下してきたと考えられる。横倉山委員会より、自主学習ノートの展示・

表彰の取り組みを行ったが、数値の改善には反映されなかった。その後、横倉山委員会や担任からの宿題をすることの意味を呼びかけることで、徐々に上昇し、11月に時間達成率、提出率ともに90%を超えることとなり、目標まであとわずかまでせまることができた。

(ウ) 成果(○)と課題(●)

○目標の指標には届かないものの平均すると時間達成率 89%、提出率 86%、ふれ幅も約 6%ほどで、それなりに高い数値で取り組めている。

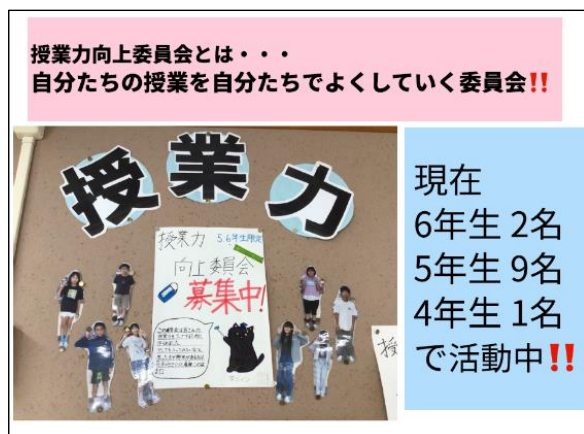
●各学年ともに特定の家庭学習をしていない児童がいた。そのような児童に対して担任まかせだけではなく、組織的な手立てや、個別支援的な手立てをとればよかった。

●宿題をこなすだけの意識の児童がおり、各個人の自学の内容についてレベルアップさせていく手立てが必要だった。

⑤ 主体的な活動

ア 授業力向上委員会

(ア) 授業力向上委員会の募集呼びかけ



2 学期始めに自律型学習者の育成を目指すために、自分たちの授業を自分たちでよくしていく委員会を設立した。開始直後は、5年生 6 名、6 年生 2 名であったが、現在は 4 年生 3 名、5 年生 9 名、4 年生 3 名と少しずつではあるがメンバーが増えてきた。メンバー募集のポスターも自分たちで作成し、全校に呼びかけている。最初は、自信が無かった児童も通信の発行や自分たちで考えた授業を行うことによって自己肯定感を高めながら活動を行っている。

(イ) 活動内容

a 研究授業の通信発行

9 月 13 日の第 2 学年国語科の研究 授業を委員全員で参観した。参観中は、学習リーダーの発言や行動について、付箋に感想を書きながら 2 年生の授業を見ることができた。その後は、委員長がアプリ【Pages】を使って通信を作成した。ほとんどアドバイスなく自分が見て考えたことをまとめ、集会で発表することができた。その後も研究授業の度に通信を発行し、自分たちの授業力の向上に努めた。

今年度のチャレンジ

【第1弾：研究授業の通信発信】

向上委員会
委員長
(6年生)が
自力で作成！

b セルフ授業の撮影・反省

研究授業外においても高学年では、日々の授業を撮影し、5・6年同士でお互いの授業を見合った。そして、感想をロイロノートの共有ノートで交流し合い、自分たちの授業を高め合うことができた。「評価される」という視点がお互いの学年に生まれたことで、授業にも気合が入り、積極的な話し合いを行いながら学び合うことができた。

今年度のチャレンジ

【第2弾：セルフ授業の撮影：反省会】

日常のセルフ
授業を撮影し、
向上委員会で
反省会！

c 研究授業の参観も他者参照

タブレット活用を授業力向上委員会の中で増やしていくことで、研究授業の参観中も共有ノートを用いて他者参照しながら授業について交流することができた。教育DXの授業実践のように、今考えていることを即交流することができるよさを見童たちが実感することができた。

今年度のチャレンジ

【研究授業も参観！】

11月7日の6年生の授業（社会）
良いのは黄色 改善点は水色
最初 真ん中 最後

研究授業でもふせんにたくさん良い点や改善点を記入・共同編集！

d 異学年交流の挑戦【4・5・6 年による合同体育：シンクロマット！】

2 学期後半になると、従来実践してきたセルフ授業をさらに進化させた。授業力向上委員会を学習リーダーとして、委員会のメンバーが在籍している 4・5・6 年生総勢約 70 名で合同体育を行った。1 時間扱いの計画で終わるのではなく、5 時間の単元を計画し、実践を行った。1 時間目は、仲を深めるためにドッジボールやおにっごなどを行った。45 分の授業の流れを休み時間に集まって計画し、自分たちで全て進めることができたことで、自信につなげることができた。



【教育 DX の研究発表会に児童が発表した内容：ロイロノート】

2. 指標

月	内容	達成目標
4 月：6 年生	全国学力・学習状況調査	全国平均以上 平均正答率 70%以上
4 月：2～5 年生	総合学力調査	平均正答率 80%
12 月：4～5 年生	高知県学力定着状況調査	全国平均以上 平均正答率 70%以上 個人伸び率 10%アップ
2 月：1～3・6 年生 4 年生理科	総合学力調査	平均正答率 80% 個人伸び率 10%アップ

3. 研究計画

月	教育 DX の推進	育成指標 (系統表づくり)	加力学習	家庭学習	主体的な活動
4	6 年生：全国学力・学習状況調査 指標：平均正答率 70%以上 2～5 年生：総合学力調査 (目標値差) 指標：平均正答率 80%以上				
5					
6	5 年生 算数科公開授 業				
7					
8		ICT 活用能力 基礎的な力 学び方			授業力向上委員会の 募集呼びかけ
9					授業力向上委員会の 立ち上げ
10					
11	6 年生 社会科公開授 業				
12	4・5 年生：高知県学力定着状況調査 指標：平均正答率 70%以上				
1					
2	1～3・6 年生及び 4 年生理科：総合学力調査 指標：平均正答率 80%以上				
2	育成指標チェック ○学習リーダー ○教育 DX の視点に立った授業改善 ○デジタルドリル活用 ○情報活用能力				
3					

4. 研究の成果(○)と課題(●)

○これまでの授業づくりから、学んだ知識を使うという授業づくりが変わってきた。加力は、組織的に内容改変をすることができた。

○教育 DX を一年間研究することで、以前の学習リーダーを主体とした授業づくりよりも、さらに主体性を培うことができた。今までの学習リーダーにおいては、一見主体的な一面がある一方、形式的でマンネリ化してしまっているという課題が見られていた。しかし、教育 DX の導入により、児童たちは自分のペースで焦ることなく、計画的に勉強を進めることができた。今後は講師の大久保紀一郎先生がおっしゃっていたように、教師が主体となって教え込んでとる点数ではなく、自分たちで学びとった点数となるように取り組んでいきたい。そして、教育 DX を視点

とした学力向上に取り組んでいながら児童一人ひとりが安心・安全と感じる学習環境を整えていきたい。

○AIドリル等の活用や研究計画のDX化に伴い、学校全体のICTスキルの向上にもつながってきた。

来年度も円滑にICT活用を行っていけるように周知徹底を図っていく。

- いろいろな取組が十分な学力定着には結びつかなかった。基礎・基本の定着，確認の徹底を図る必要がある。協働的で個別最適な学びの捉え方を明確にする必要がある。
- 児童にゆだねることで，確実な見取り・評価が不十分な点が見られる。今後は，ゆだねた部分をどのように見取り，評価するかが課題である。

Ⅱ-2 研究の概要（生活部）

1. 生活部の取組

（1）研究方法・研究内容

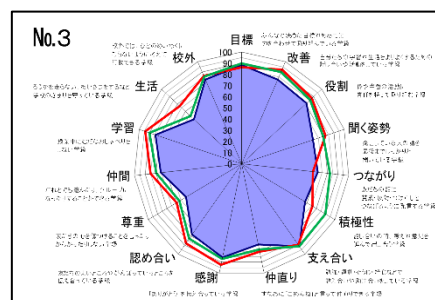
①学級力向上 （特別活動の充実）	②基本的な生活習慣	③仲間づくり	越知小スタンダード （生活のきまり）
ア 学級力レーダーチャート イ スマイルタイム ウ スマイルアクション エ 全校に発信 オ 全校に共有 カ 次の学級力アンケート で学級力の再自己評価	ア 生活リズムチェックカードの取組 イ 「No メディアデー」の実施 ウ 給食保健安全委員会による健康	ア スマイルの木・葉っぱ	ア 生活指導 イ 「あいさつ」と「聴く」の徹底

① 学級力向上

学級力向上プロジェクトに取り組んで6年目となる。子どもたちがめざすよりよい学級づくりの実現に向け、子どもたちが主体的に活動する過程を通して、自ら所属する学級をよりよく改善していくためのマネジメント力身につけるための取組である。

ア 学級力レーダーチャート

学級力レーダーチャートは、領域・項目ごとの平均値が可視化されたグラフであり、その形状や領域別達成状況を指標として児童が学級の実態を把握するのに活用する。前回や前々回のアンケートの結果を色つきの実線で表示することによって、学級力の変容が児童に見やすくなるように工夫されている。



イ スマイルタイム

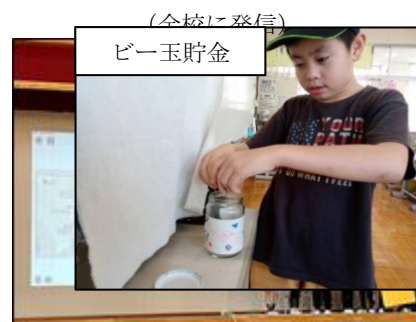
スマイルタイムは、学級力アンケートの結果をもとに児童が自分たちのクラスの成果と課題を話し合う時間である。学級力の高い領域・項目と低い領域・項目を取り出してそれぞれの原因や背景を分析したり改善のための取り組みを考えたりする姿がみられる。取組の成果を児童に実感させながら、さらに学級力を向上させるためのアイデアを話し合う活動を行っている。

（スマイルタイム）



ウ スマイルアクション

スマイルアクションとは、学級力を高めるために児童が取り組む活動である。自ら所属する学級をよりよく改善していくために、児童自身が考えた活動に取り組んでいる。



エ 全校に発信

スマイルタイムで話し合ったことや、取り組むスマイルアクションについて集会で全校に発信した。それぞれの学級の実践を宣言したことで、児童のやる気につながった。

オ 全校に共有

学級で取り組んでいるスマイルアクションについて、掲示板を用いて全校に共有した。普段知らない他の学級の実践を知ることができた。

カ 次の学級力アンケートで学級力の再自己評価

スマイルアクションへの取り組みを踏まえて、自分たちの学級がどのように変化したのか、学級力アンケートで再評価を行った。スマイルアクションに取り組み、再評価をする活動を繰り返していく中で、さらなる学級力の向上を目指していく。



《成果》

- 学校行事や Being と関連させてスマイルアクションに取り組むことで、より自分事として自分自身や学級のことを捉えることができる児童が増えてきた。
- 学級力アンケートをもとに R - PDCA を効果的に活用することで学級づくりに進んで参画することができるようになり、主体性や協働性、創造性が少しずつ高まってきた。

《課題》

- 「楽しい」「やってみたい」と思うことができる目標の設定や振り返り、スマイルアクションについて研究していく必要がある。
- レーダーチャートや各クラスの実践について教師間の情報交換が弱かった。よりよい実践につなげていかなければならない。

② 基本的な生活習慣

【本校の生活習慣の課題】

- ・低学年から基本的な生活習慣が身に付いていない児童がいる。
- ・長時間のメディア使用により、睡眠不足や体調不良を訴える児童がいる。
- ・就寝時刻とメディア利用時間の目標を守れない児童が多い。

以上の課題から、メディアとの付き合い方や早寝・早起き・朝ごはんの指導を中心に、基本的な生活習慣の確立に向けた取組を行っている。

ア 生活リズムチェックカードの取組

【目的】

児童が、長期休業で乱れがちな生活リズムを立て直し、学期当初によいスタートが切れるようにすることを目的とする。

- ・「生活リズムチェックカード」を用いて、2学期、3学期当初の7日間の生活リズムをチェックする。実施後は、各自でレーダーチャートを作成し、振り返りや保護者の感想を記入する。
- ・生活リズム名人になった児童には表彰状を贈る。

- ・早寝をしてゲームの時間を減らしたいと思います。朝は早く起きられるようになりました。

○実施前に保護者向けにおたよりを配付したこと
で、児童だけでなく保護者にも取組を周知し、
協力を得ることができた。

○生活リズム名人が 60%(昨年度比+3%)と昨年度に比べると増加している。

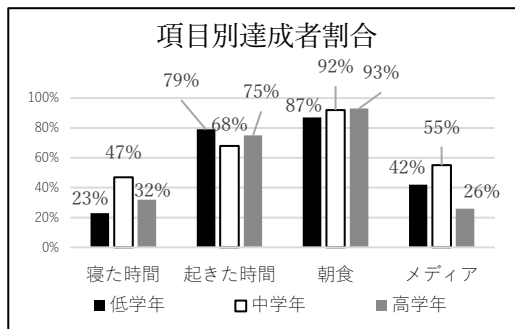
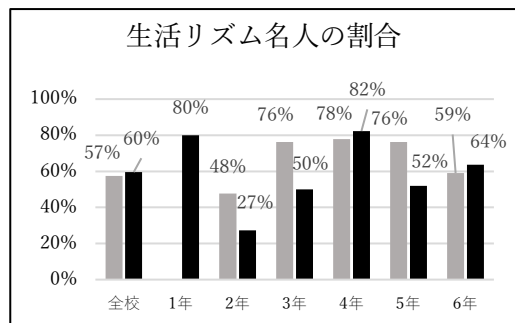
●低学年で生活リズムを整えることが難しい児童が多かった。
低学年は保護者のライフスタイルが影響していることも考えられるため、児童へ規則正しい生活習慣を送ることの大切さについて指導を行うとともに、おたよりだけでなく家庭での実践につながるような取組を行っていく必要がある。

●継続した取組は行っているが、「就寝時刻」と「メディア使用時間」の達成者率が低い。

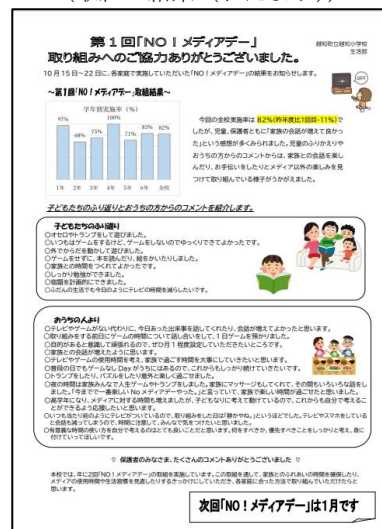
【目的】

電子メディア機器の使用過剰による睡眠不足等の生活習慣の乱れを改善し、親子・家族・地域等とのコミュニケーション力の育成、豊かな心を育む。

- ・10月と1月の年2回実施（各自1週間のうち1日を「No!メディアデー」に設定し、目標を決めて取り組む。）
- ・児童だけでなく保護者にも取組を周知し、その結果をおたより等で知らせる。



(取組の結果 (おたより))



《成果》

- 「No!メディアデー」の取組は今年度で26年目を迎えた。継続して実施することで、家庭全体で日常生活を見直すよいきっかけになっている。
- 実施後の児童の振り返りからは、身体を動かしたり、読書をしたりとメディアから離れる時間を有意義に活用している様子がうかがえた。また、保護者からは、「家族でコミュニケーションをとる時間に充てることができた」「No!メディアデー」を定期的に実施してほしい』などの肯定的な意見が多数みられた。

《課題》

- 家庭環境や生活環境により家族全員で取り組むことが難しい家庭もある。
- 今回の全校実施率は82%（R5年度比-11%）と年々減少しており、メディアから離れることができない児童も増加している。児童だけでなく、保護者への啓発が課題である。
- メディアとの関わり方については、児童一人一人が自己をコントロールできる力を身に付けることができるよう、メディアの長時間使用による心や体への影響や各家庭におけるルールづくりの大切さについて継続して伝えていく。

ウ 給食保健安全委員会による健康クイズ

生活リズムチェックカードや生活アンケートの集計結果から見えた課題をもとに、健康に関するクイズを作成し、集会で発表した。クイズを通して朝ごはんの大切さやメディアの長時間使用による影響を知るとともに低学年から高学年までが自分の健康について楽しみながら考えることができた。

（メディア使用に関する啓発資料）



（集会で発表している様子）



③ 自己肯定感・自己有用感向上

ア スマイルの木・葉っぱ

児童玄関の正面に掲示されている「スマイルの木」は、昨年度の「ありがとうの木」から名称を変えた。「ありがとうの木」は、友達や先生、支援員さん、地域の方等へ、日頃の感謝の言葉を葉に書いていた。今年度「スマイルの木」とすることで、友達などへの感謝だけでなく、一人一人の児童の自己肯定感をさらに高めていくことを目指し、友達の頑張っていることや得意なことを伝え合うことを盛り込んでいる。

《成果》

- 道徳アンケートの中での「自分にはよいところがある」の全校児童の肯定的意見が、R5年79%から84%に上がっていた。

《課題》

- 友達の良い所も探すことができるように、声かけを行う。

（職員室 スマイルの葉ポスト）



（児童玄関前 スマイルの木）



自分にはよいところがあると思う R6						自分にはよいところがあると思う R5					
1 学期	(できている) （そう思う）	どちらかといえば （できている）	どちらかといえ （できていない）	（できていない）	計	3 学期	(できている) （そう思う）	どちらかといえ （できている）	どちらかといえ （できていない）	（できていない）	計
1 年	19	5	2	1	27	1 年	18	3	2	1	24
2 年	16	3	2	0	21	2 年	17	4	1	1	23
3 年	20	3	0	0	23	3 年	12	2	1	3	18
4 年	10	5	1	2	18	4 年	13	9	3	4	29
5 年	13	8	4	2	27	5 年	4	14	3	2	23
6 年	7	8	4	4	23	6 年	9	10	8	2	29
計	85	32	13	9	139	計	73	42	18	13	146
	61%	23%	9%	6%			50%	29%	12%	9%	

④ 越知小スタンダード

ア 生活指導

(ア) 越知小生活のスタンダード【学校生活のきまり】

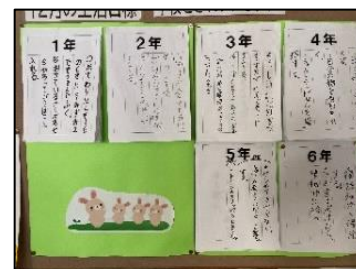
児童が健全に日々の生活を送るための基本的な約束事をまとめた「越知小生活のスタンダード」をデータ化し、昨年度からタブレットにて全児童に配付している。必要な時に全員で確認することで規範意識の育成に役立っている。内容は（１．登下校について ２．校内での生活について ３．校外での生活について）の３章からなり、教職員も見直しを行い、家庭への啓発とともに、これに基づき一貫した指導を行っている。また、長期休みの前には、スタンダードを基に過ごし方において特に注意すべき点を意識してもらうよう話をしている。



(イ) 生活目標

基本的な生活習慣の重点指導を各委員会からの提案という形で取り組んでいる。集会で各委員会が月目標を提案し、学級で具体的な取組を話し合い児童玄関前に掲示している。取組の達成状況を担当委員会が評価し、全体の意識付けを行っている。学級で「振り返る」「明日につながる」「改善する」ことの継続した取組が成果として定着している。

	月目標	担当委員会
4 月	友達と仲よくしよう	仁淀川
5 月	運動会を成功させよう	計画
6・7 月	本をたくさん読もう	図書
9 月	進んで学習しよう	横倉山
10 月	時間を大切にしよう	放送
11 月	学校をきれいにしよう	栽培・美化
12 月	丈夫な体をつくろう	体育
1 月	生活リズムを整えよう	給食保健安全
2 月	あいさつ名人になろう	スマイル
3 月	一年のしめくりをしよう	生活部



(各学年の生活目標)

(月目標と担当委員会)

イ 「あいさつ」と「聴く」の徹底

本校では、「あいさつのできる子」の育成、及び「あいさつを通しての地域連携」を目指している。また、「聴く」ことを通して、自分も友達も大切にする事の徹底を呼び掛けている。毎週金曜日の集会活動では、学級でもあいさつや聴く姿勢を意識するために、横倉山委員会を中心に全校児童に呼びかけている。各学級でも普段の授業で意識するよう、担任を中心に声掛けを続けている。呼びかけを続けた結果、自分からあいさつをする児童が少しずつ増えてきた。地域の方からも「〇〇さんがすごく大きな声であいさつをしてくれるようになって嬉しい。」などといった声を頂くことが増えた。今後も定着を目指し、取組を継続していく。



(2) 指標

月	内容	達成目標
4	第1回スマイルタイム（メ切り4/12） スマイルアクション提出（メ切り4/18）	全学年スマイルアクションに取り組む
5	第1回学級力アンケートの実施（5/7～5/10）	全学年アンケートを実施する
	第2回スマイルタイム（5/13～5/16） 第1回学級力アンケートの結果をレーダーチャートで提示する	全学年スマイルアクションに取り組む 全学年レーダーチャートを教室に掲示する
	Q-U（5/29～5/31）	全学年メ切までにQ-Uを行う。
6	第2回学級力アンケートの実施（6/17～6/19）	全学年アンケートを実施する
	第3回スマイルタイム（6/20～6/24） 第2回学級力アンケートの結果をレーダーチャートで提示する 第1回目のアンケート結果と比較し、感想や気づきを発表させる	全学年スマイルアクションに取り組む 全学年レーダーチャートと振り返りを教室に掲示する
	第1回学校生活アンケート（6/3～6/7）	全学年学校生活アンケートを実施する
7	道徳アンケート1回目（7/1～7/5）	「自分にはいいところがある」 全校児童肯定的意見80%以上
9	生活リズムチェック1回目（9/3～9/11）	
10	第3回学級力アンケートの実施（10/3～10/7）	全学年アンケートを実施する
	第4回スマイルタイム（10/8～10/10） 第3回学級力アンケートの結果をレーダーチャートで提示する 第2回目のアンケート結果と比較し、感想や気づきを発表させる	全学年スマイルアクションに取り組む 全学年レーダーチャートと振り返りを教室に掲示する
	第1回「NO!メディアデー」（10/15～10/22）	
11	Q-U（11/5～11/8）	全学年メ切までにQ-Uを行う。
	第2回学校生活アンケート（11/5～11/8）	全学年学校生活アンケートを実施する
1	道徳アンケート2回目（1/8～1/31）	自分にはいいところがある 全校児童肯定的意見83%以上
	生活リズムチェック2回目（1/14～1/22）	

1	第2回「NO！メディアデー」(1/21～1/28)	
2	第4回学級力アンケートの実施(2/26～2/28)	全学年アンケートを実施する
3	第5回スマイルタイム(3/3～3/5) 第4回学級力アンケートの結果をレーダーチャートで提示する 第1～4回目のアンケート結果と比較し、感想や気づきを発表させる ・1年間の取組を振り返る	全学年スマイルアクションに取り組む 全学年レーダーチャートを教室に掲示する

(3) 研究計画

月	学級力向上	基本的な生活習慣	仲間づくり	越知小スタンダード (生活のきまり)
4	第1回スマイルタイム			生活スタンダード配付
5	第1回学級力アンケート 第2回スマイルタイム		Q-U	
6	第2回学級力アンケート 第3回スマイルタイム		第1回学校生活アンケート 第1回道徳アンケート	
7				
8				
9		第1回「生活リズムチェック」		
10	第3回学級力アンケート 第4回スマイルタイム	第1回「NO！メディアデー」		
11			第2回学校生活アンケート Q-U	
1		第2回「生活リズムチェック」 第2回「NO！メディアデー」	第2回道徳アンケート	
2	第4回学級力アンケート			
3	第5回スマイルタイム			生活スタンダード修正

(4) 生活部の成果(○)と課題(●)

《成果》

○今年度、本校では、「心のこもった気持ちのよいあいさつ」と相手を大切にする「聴き方」を二本柱として1年間を通して重点的に取り組んだ。その1つの「あいさつ」については、道徳意識アンケートの「人に出会った時、すすんであいさつをしている」の項目で、肯定的回答84%となり昨年度(79%)と比較しても+5ポイント上昇できた。これは、全教員があいさつの

値打ちや大切さについて意思統一をし、自分たちの実践を通して啓発してきた成果と考えられる。

- 「学級力・学校力向上の取組」を継続して行ったことで、道徳意識アンケートの「学級活動では、仲良く話し合い、楽しい生活にしようとしている」の項目で、肯定的回答96%となり昨年度（92%）と比較しても+4ポイント上昇できた。これは、全校集会で全学級が学級の良い点・改善点・これからの取組を発表するなど全学級で1年間を通して取組を進めてきた成果と考えられる。

- SCやSSW、管理職、養護教諭が連携し、支援会を中心に家庭や教職員への包括的な支援体制を整えることで、組織的に問題を解決できた事例が増えた。

《課題》

- 今年度、「心のこもった気持ちのよいあいさつ」と相手を大切にする「聴き方」に重点的に取り組むことが出来たが、今後も引き続き、全教員があいさつの値打ちや大切さについて、学級などではもちろんのこと全校集会の場面でも、全教員が意思統一をし、自分たちの実践を通して啓発していく必要がある。
- 道徳アンケートの中での「自分にはよいところがある」の全校児童の肯定的意見が、昨年度79%から84%に上がっていた。ただ、6年生を対象に行った全国学力状況調査の質問紙によると、「自分に良いところがあると思う」という質問に対し、肯定的評価が72.3%と、全国平均よりも11.3%低くなっている。このことから、低学年の子どもたちはもちろんのこと高学年の子どもたちに対しても、全教職員が生徒指導の三機能「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的な人間関係を育成する」を意識し、人権の視点に立った一人一人が大切にされる授業づくりや、教育活動を通したコミュニケーション力の向上、他の人の立場になって物事を考えられる想像力の育成に向けた取組をこれからも実践していく。
- 「授業づくりも自分たちで、学級づくりも自分たちで、学校づくりも自分たちで」を合言葉に、学級力を活用した学級づくりに取り組んでいるが、子ども主体で活動する場面が少なかった。子どもたちが様々な教育活動に主体的に参画することができる機会を今以上に計画、実践し、「自立的」で「自律的」な学習者の育成を目指す必要がある。

